



第55回 金沢教区同朋大会 開催



講師の田畑正久氏

がんとともに生きる人たちのほつと一息つける居場所づくりを願い活動が始まったと語った。

記念講演は田畑正久氏（佐藤とよかわクリニック院長）が「老病死による苦悩を超える道」という講題でお話された。田畑氏は現役の医師であり、また若い頃から仏教にもご縁があったそう。だ。「医師50年、開法50年。仏教にであう前は医師になることで生老病死の四苦を解決できる気でいたが、大学時代に仏教の師となる細川巖先生に出あい、開法の生活が始まった。仏教も医療も生老病死の四苦の解決を共通の課題にしている」と述べた。

今年「老病死の問題と向き合う」という開催趣旨のもと、記念講演の前に問題提起の時間が設けられ、西村詠子氏（「がんとむきあう会」理事長）がお話された。西村氏は、がんとともに生きる人たちに寄り添う活動をしている。「がんとむきあう会」は2016年に設立され、初代の理事長は西村氏の夫で医師の西村元一氏（2017年5月逝去）。その西村元一氏ががんと診断されたことで、がんとともに生きる人たちに大切なことはなにか。自身も含めた

池崎朋樹（第四下組 正林寺）

僧侶研修小委員会 儀式作法講習会

真宗大谷派における葬儀

さる4月15日、僧侶研修小委員会主催の「儀式作法講習会」が開催され、本山より近松誉本廟部長を招き「真宗大谷派における葬儀（儀式執行者の心得）」という講題でお話を伺った。

講義では、まず人類における葬儀の歴史から、他宗における葬儀の意義など、広く人間と葬儀の関わりについて紹介したうえで、真宗大谷派の葬儀の意義を「衆生に帰依三宝を勧める。個人を諸仏といただくことを確かめること」であると述べた。

近松氏のお話は、多様化、簡略化する現代の葬儀に対して、従来から行われている形式での葬儀をするべきだというスタンスをとるのではなく、「形式は時代や地域、慣例によつて変容するものの、前述の真宗大谷派の葬儀の意義を見失わないことが大切」であると語ったことが印象的であった。また、その意義を伝える役割を



講義する近松誉本廟部長

担う僧侶の心構えとして、一つとして同じ葬儀はないということや、門徒や遺族の方と丁寧な会話を重ねることにより、想いをくみ取ることの重要性を教えていただいた。

これからも葬儀の形は変容を続け、その都度、儀式の在り方に悩むことも出てくるだろう。その際は今回の講義で聞いた真宗大谷派の葬儀の意義、および僧侶の心構えに立ち返りたいと思う。

澤野俊英（第十一組 應現寺）

解放運動推進委員会

ハンセン病問題現地学習会 開催

6月5日から一泊二日で、希望者と委員の合計11名で群馬県草津町にある「栗生楽泉園」を訪問した。

解放運動推進委員会では昨年度、「ハンセン病問題を自分の問題として取り組むとはどういうことか」と問題提起し、学びを深め、今年度は実際に施設を訪ねることで、それぞれ自分なりの「交流」のあり方を考えることを今回の学習会の目的とした。

現地では、まず「資料館」を見学し、次に「納骨堂」に参拝した。2日間で4名の入所者の方と面会し、入所までの経緯や、家族との別れ、暮らしぶり等、これまでの事やこれからの事についてのお話

を幅広く聞かせていただいた。

今回の現地学習会は、コロナ下による停滞を乗り越え、教区の活動としては8年ぶりの訪問となった。現在の入所者は29人で、平均年齢は90歳と聞いた。2日目に見学した「歴史館」の学芸員の方が「ここには多数の展示品がありますが、展示品だけが全ての展示ではないということを感じて欲しい」と言われた。展示品それ自体は物言わぬが、それを使っていた人の声も聞いて欲しいという願いのように感じた。学習会に先立ち、委員の先輩が言っていたことを思い出した。「人に会って、自分が聞いたことを周りの人に話してください」。これが入所者の願いだという。目に見える人、目に見えぬ物の声を聞いていこう、そして話そう。私にとつての交流のあり方を教えてもらえた有意義な学習会だった。

齋藤世紀（第四東組 専稱寺）



交流会の後、入居者の方と